

[エッセイ No.26 静けさを聴く]

内田樹氏の著書によると、今の子供たちは「ハンカチ落とし遊び」ができないそうだ。今は「ハンカチ落とし」という遊びどころか、言葉を知らない子供たちがほとんどなのでは、と思うが、私の世代の人たちは、おそらく皆、小学校の授業の一環などで経験したのではないだろうか。

10人から15人ほどが目をつむって内側を向いて円陣になって座り、一人が外側の周りをゆっくり歩きながら、“誰か”の後ろに、わからないようにそっとハンカチを落とす。落とされた子が気がつくか、気がつかずにそのままになるか。要するに、ハンカチが体の近くに落とされたかを“見ずに当てる”遊びだ。その何が面白いのか、と問われれば説明に困るけれど、昔、そんな「グループでの静かな遊び」があった。

やってみればわかると思うが、一枚のハンカチがひらひらと落ちる音が耳で聞こえるわけではない。落ちる気配を背中を感じられるかどうか、がポイントだ。そしてこの“気配を聴く”には、ものすごい集中力が必要とされる。自分の内面と外側、そして体全体を「耳」にする。

内田氏は武術の「塾」を持っていられるので、そこで学ぶ子供たちが、「気配」、あるいは「気」を感じ取れるかどうか、を「ハンカチ落とし遊び」で試したのだと思う。そして愕然としたそうだ。この、体の繊細な感覚、背中でハンカチの気配を感じ取る感覚が今の子供たちに失われていることに。「気」で間合いを計ったり勝負をしたりする昔のサムライたちには、きっと当たり前であったろう集中感覚。

ふと周りを見回してみると、「ハンカチ落とし遊び」が無理なものも、一目瞭然のような気がする。まずは我々の今の環境はあまりにも雑音が多い。この中でどれだけ“ハンカチの音”を聴くことができるのか！そして電車の中を見回すと、90%に近い人たちが、耳にはイヤフォンをしながら、スマホに憑りつかれている。自分の世界だけに浸って、外側で起きることには興味がなさそうだ。

おそらく彼らは、話しかけられても気づかないだろうし、スマホの世界に没頭していて、たとえ話しかけたとしても外部からの“邪魔”は、邪魔でしかないだろう。すべての集中力はスマホの画面に向けられている。ほかの外部の「雑音」を遮断して、スマホからの音は直接耳から体の中に“入って”いく。頭の中も心の中もその時点ではスマホに「支配」されているのではないだろうか。

もちろん、純粹に音楽を楽しんでいる人たちもいるだろう。でも、ソニーから「ウォ

ークマン」が出る以前は、音楽を“持ち歩きながら”楽しむことは不可能だった。不可能だったから、できなくても不満ではなかったし、その時間はほかのことに費やしていた。例えば、学校の授業の予習とか、頭の中で好きな人への思いを綴ってみるとか、本を読むとか。これらは今でも「可能」だし、私自身は電車に乗ると、昔と同じように文庫本を取り出してしまう。時には、頭の中でコンサートで歌う曲の暗譜の練習をする。

イヤフォンで音楽を聴き続けると難聴になりやすい、少なくとも聴力への影響は著しいと言われる。それをどう思うかと、一度ソニーの幹部の人に尋ねたら、「うちでは補聴器も作っています！」と涼しい顔で返された！

何を不快な音と感じるかは、大きな個人差がある。最近話題になったのは、野外ステージでの大音量のライブコンサート。聴きに来ている人たちには「音楽」でも、関係のない人たちには、無遠慮に生活空間に入り込んでくる、ただの「人工雑音」にしか過ぎない。私も40年ほど昔、沖縄に「ゆっくりしに」行ったら、目の前の海辺に組まれた「チェッカーズとかいうグループ」のステージから、ホテルの部屋までガンガンと音が響いてきて、夫とフロントへ文句を言いに行った。「ただで聴けるのに、何が不満なんだ」と逆に不思議な顔をされてしまったが。

「ピアノ殺人」なんていう事件が何回も起きた。ピアノを持つことが「上流家庭のステータス」のように言われた時代だ。防音などきちんとしていない団地の部屋では、上下左右に隣接する部屋に響くピアノの音が神経に触った。現代では、公園で遊ぶ子供の声がうるさいという話がよく聞かれる。(ピアノの「練習」はコンサートで聴く「音楽」とはかなり違う！)

でも、野外舞台の大音量と公園の子供の声とは決定的な違いがある。それは、音響装置によって人工的に大きく響くように作り出されている音か、自然に生まれている音か、ということではないだろうか。私自身は、極端かもしれないが、好きな音楽を聴く場合もヘッドフォンやイヤフォンは避けてしまう。わざわざ機械を通して音を耳に直接入れると、心地よくないと体が感じてしまうからだ。空気という自然媒体を通じて体全体に感じる音は、空気自体が開放的だし、同時に緊張感に満ちる、濃密な世界も作り出す。コンサート会場で大勢の人と共有するナマの音楽の場合、その緊張感と濃密さはより増す。

だからこそ「針の落ちる音」も響いたり、携帯の着信音が余計に大きく邪魔になったりする。最近読んだ記事で、高座の「怪談噺」のクライマックスで携帯が鳴った話

があった。話し手は一度はスルーしたものの、再度鳴ったときはさすがに耐えられずに高座を降りてしまったとか。(高齢者が携帯の切り方をわからなかった可能性ももちろんあるが。)

一方、ロンドンの公演でやはり携帯が鳴った、その着信メロディを拾って演奏に繋げ、大反響を呼んだピアニストもいる。角野隼人氏だ。すごい才能、としか言いようがない。ただ「怪談噺」のクライマックスは、会場にいる全員が「針の落ちる音」が聞こえるくらいの密な空気の中で静けさの音を聴こうと、全神経を集中している場である。そこに響いた携帯の人工的な音は、きっと「最高の緊張感に満ちた世界」を作り出したかった彼の思いを、ガラガラに壊してしまったのだろう。

話はちょっと逸れるが、最近 TV で興味深い番組を見た。興味深かったのは内容そのものというより、昔と今の「若い人たち」の緊張感の違いの話だ。「黒ひげ危機一発」という有名な玩具の遊び方を巡って、世代によって感じ方が違うらしい。「昔」の世代の人たちは、「“黒ひげオジサン”がどうか飛び出しませんように！」と祈りながら、ドキドキする緊張感を楽しんだのに比べ、「今」の人たちは、「どうか飛び出しますように！」との期待感でドキドキするのが楽しい、と言っていた。体の中に起こる反応の違い、それは内面の緊張感を濃密にする楽しみ方と、開放する楽しみ方の違いではとふと思った。

逸れたところで元に戻ろう。もしかしたらこれは、音楽の楽しみ方にも通じるのかもしれない。世代というより、コンサートの様子を見ると、いわゆるクラシック音楽愛好家と“流行りの音楽”のファンの違いは明らかだ。「針の落ちる音」も聴き逃したくない、「静けさを聴く」ことを大切にするクラシックファン、一方、初めから終わりまで自己を開放する喜びに身を浸す、エンタメ系音楽の聴衆。どちらも、舞台上の音楽との一体感を求めることは同じだが、クラシック音楽の場合は、演奏されている間の緊張感や一体感が強ければ強いほど、余韻を味わった後の解放感は大きい。それが顕著に表れるのが、溢れ出る感激の「ブラヴォー！」の叫び声ともいえる。

どの音楽に惹かれるかはそれぞれだし、自由だ。喜びを見いだせるものに出会えるだけでも幸せと言える。ただ、それがほかの人に迷惑になる可能性のあることにも、心すべきだろう。

デンマークの電車には「沈黙車両」があると聞くと、ドイツやオーストリアでは午後の1時から3時は「静かな時間」と言われる時間帯があり、簡単に言えば、皆がゆっ

くりと「お昼寝」をする(はずの)1時から3時は、マンションでのピアノなどの練習も禁止、静けさを破ってはいけない、というルールだ。

ところで、私が日本で大っ嫌いなのは、あの選挙カーの大声！！ 意味があるのかしら、どうにかならないものかしら？！ 誰も気にならないのかしら？！